

P1-021

「特定教育・保育施設等における事故情報データベース」の事故発生の要因分析における改善策の内容分析について

朴 淳香

静岡県立大学短期大学部 こども学科

【背景】

近年、低年齢からの多様な保育施設での就園率増加に伴い、高い実践力を持つ保育者による適切な安全指導と安全安心な環境が整った保育の質の確保が求められている。安全教育は、新保育所保育指針（平成30年4月施行）において、子ども自身の危険を回避し対処する力を育てることと同時に、事故の再発防止への取り組みに重点が置かれた。このような中、教育・保育施設等の死亡事故及び負傷等に関する地方自治体から国への報告が、平成27年4月より開始、「特定教育・保育施設等における事故情報データベース」（内閣府）（以降「事故情報データベース」と記す。）として公表されている。

【目的】

「事故情報データベース」には事故の要因分析に関する項目がおかれ、ソフト面、ハード面、環境面、人的面ごとに改善策が記載されている。本研究では、改善策に記載のテキストデータの内容を分析することにより、再発防止につながる手がかりを得ることを目的とする。

【方法】

「事故情報データベース」には、認可保育所、認定こども園、幼稚園、放課後児童クラブ、地方裁量型認定こども園、小規模保育事業、事業所内保育事業（認可）、一時預かり事業、ファミリーサポートセンター、企業主導型保育事業、その他の認可外保育施設の類型があるが、本報告では、平成29年4月分から平成30年3月分の610件中、0～6歳の子ども423件を対象とする。ソフト面、ハード面、環境面、人的面ごとの改善策の記載内容について、計量テキスト分析ソフト「KH Coder」を用いて、内容分析を行い、事故の発生を防ぐポイントを整理する。

【結果】

ソフト面では、「職員」に「事故」「研修」「防止」「マニュアル」「確認」「行う」が頻出しており、「子ども」に「保育」「配置」が頻出していた。ハード面では、「安全」「点検」に「遊具」「行う」が頻出し、「保育」に「子ども」「環境」が頻出し、「確認」と「庭」「マット」と「使用」の関連が示されていた。環境面では、「保育」「子ども」に「遊び」「確認」「職員」「危険」「行う」「安全」が頻出し、「遊具」に「遊び方」「使用」の関連が示されていた。人的面では、「子ども」「職員」「保育」に「声」「確認」が頻出していた。

【考察】

改善策としての主要なポイントは、ソフト面とハード面では物的要素が、環境面と人的面では、保育の流れに位置づく人的要素と考えられた。

P1-022

小児慢性特定疾病児童等自立支援事業の任意事業への展開

本田 睦子、福島 慎吾、荻須 洋子、下村 美紀、
福田 菜穂子

認定NPO法人難病のこども支援全国ネットワーク

【目的】

平成27年1月より『小児慢性特定疾病児童等自立支援事業』が始まり、難病のこども支援全国ネットワーク（以下「当会」）では、東京都からの委託を受け当該事業を実施している。具体的には、当会が従前より行っている活動をもとに、必須事業として電話相談やピアサポート活動などの相談事業、任意事業としてプレイリーダーによる遊びのボランティア派遣と交流会を行っている。なお、当会独自の事業として行っているレスパイト施設「あおぞら共和国」は療養生活支援事業に、サマーキャンプ「がんばれ共和国」は相互交流支援事業に位置づけられると考えている。ここではとくに任意事業に特化して、検討・報告する。

【方法】

東京都では、平成27年に約7,000名の小児慢性特定疾病の受給者証保持者に対してアンケート調査を実施した。その調査結果から明らかになった困りごとやニーズに対して、交流会の開催、遊びのボランティアの派遣、当会独自で行っているレスパイト施設「あおぞら共和国」や、サマーキャンプ「がんばれ共和国」がそのニーズに合っているのか、事業内容の統計や利用者の感想などを振り返り、検証する。

【結果】

遊びのボランティアにおいては、定期的に訪問の需要があり、訪問先の子どもたちやご家族にも喜んでいただいている。交流会も参加人数も増え、関心の高さが伺える。また、参加者のアンケートにも「参考になった」「今後も参加したい」の回答がほとんどで、ニーズに沿っていると考えられる。また、サマーキャンプでは、子どもたちやその家族が安心して安全に楽しむことができ、他の家族との交流も深められており、レスパイト施設「あおぞら共和国」では、「家族でのびのびと過ごせる」などの感想があり、リフレッシュできる場となっていることが伺える。

【考察】

小児慢性特定疾病児童は多様であり、必要としている支援はさまざまである。個々のニーズに応じて、必須事業や任意事業、あるいは任意事業に準ずる活動を、それぞれの状況に応じて展開していく必要がある。子どもたちや家族のニーズを第一に、横断的に子どもたちや家族に寄り添った支援を引き続き行っていきたい。